

成牛および子牛の除角法について

内村 利美

牛の群飼育では角による闘争行動をなくする上で、除角が不可欠である。除角で闘争行動がほとんどなくなるため。繁殖牛は運動場へ自由に放し飼いで、牛が健康になり、発情発見も容易になる。運動場を牛を飼養する場として積極的に活用できるようになるため、現在の施設でも増頭が可能となる。肥育牛では1頭当りの牛床面積が少なくすみ、群内での闘争によるストレスが少なくなり、増体および肉質が均一化してくる。従って近代的な繁殖・肥育経営では除角は不可欠であると考えられる。しかし、成牛になってからの除角は牛のストレスが大きく、除角作業も大変であり、牛を一時的ではあるが虐待する状態になり、アニマルウエルフェアの観点からいくらか問題が残る。子牛の除角はまだ角が伸びない時期に、角が出る部位（ボタン）を鉄パイプで除去することで簡単に出来る。このため除角作業は容易であり、局部麻酔を用いれば除角時に子牛を痛めつけることがなく、アニマルウエルフェアの観点から望ましい方法である。

成牛の除角

入来牧場では成牛は油圧式の断角機を用いて除角を行なっているので、その方法について述べる。まず、牛を保定枠に保定する。その場合、頭部を前方に引いた状態で、頭を固定した方が作業がしやすい。牛が頭を左右に振らないように保定するべきである。若い牛は保定枠に余裕があり非常に暴れやすいため、前足を上げないよう肩にロープ等を掛けることも必要である。保定を充分したら、角根部の毛をはさみかバリカンで刈り取る。次に角根部をアルコールで消毒、麻酔（2%キシロカイン）7ccを注射し、3分位待つ。除角機を角根部に深く当て、スイッチを入れて切断する。その場合、除角後の顔品を良くし、同時に切傷を早く治癒させるために、両切断面が牛の前から見た場合「ハ」の字になるよう、可能なぎり角の根元深くを切断することである。切断すると血液が血管から吹き出すので消毒したタオルをかぶせ、もう一方の角を切断、同様に消毒タオルをかぶせ、別に準備していた止血用の焼きごてを用いて止血する。どんなにひどい出血でも、あわてずに時間をかけて止血する。焼きごては先端が尖っているかなづち状のものを、鉄工所で数本作って、除角作業前から炭火等で真っ赤に焼いて準備しておくことが必要である。火力を作業期間中強く維持することが重要である。止血が終わったら、化膿止めの薬を塗り、通常の管理にする。止血が不完全で再度出血することもあるので、しばらく様子を見て、出血がひどい場合は再度止血した方がよい。

農家の成牛の除角作業は、移動と火の準備に時間をとられるため、4人組で1日35頭位しか除角出来ない。規模の大きい農家で保定施設等があれば、4人組で1日50頭位除角出来る。

化膿を少なくする意味では夏季より冬季が除角には適している。1ヵ月位は採食量が減少する傾向が見られるため、分娩前後のエネルギー要求量の高い牛は、餌給与でいくらか高エネルギーの飼料を補給した方が望ましいと考えられる。まれにみるケースで、除角した跡に粘液がたまって採食量が極端に低下することがある。その場合、鼻環を高くつり上げて繋ぎ、牛が頭を振ることにより粘液を外へ流失させ、症状を軽減させる。

子牛の除角

除角する時期は生後2週間から4週間位の間で、角が出る部位（ボタン）がわかるようになる最も早い時期が望ましい。まず、子牛に「おもて」を装着し、動かないよう二人で保定する。ハサミ

でボタン部分の毛を刈り取る。次にボタン部をアルコールで消毒し、麻酔を角と目との間に5cc程度注射する。3分位の後に除角用の鉄パイプで除角する。

この鉄パイプはあらかじめ径が1.5、2および3cm程度で長さ10cmの3種類位のパイプの先端を、鉄工所で研がしてもらい（出来たら焼きを入れる）準備しておく。研がす角度があまり急であると、ボタン部の皮膚はよく切れるが、すぐつぶれるため、適度な角度で研がしておくことが大切である。また、除角作業をしやすくするため、鉄パイプの手で握る側に十字型を溶接してもらうことも必要である。除角用具のイメージとしては、椎茸の菌を木に打ち込む場合、木の皮をマルクくり抜く道具があるが、あのようなものを鉄パイプで作るということである。

除角はボタン部より直径が3mm位大きめのパイプを選び、ボタン部を囲んで、直角に当てる。強く押しながら皮膚が切れるまで左右にねじ込む。周囲の皮膚が切れたら、パイプを斜めにして、丸く切れているボタン部を含む皮膚をはぎ取る。この時、ボタン部より小さい径のパイプを用いると、更に大きな角が出てくるので、くれぐれもボタン部より大きいパイプを用いることが重要である。除角時期が早い程、出血も少なく、除角が容易に出来る。止血は脱脂綿を除角部に当て、指圧によって行う。化膿止めのため傷口にはサルファ剤を塗布しておく。冬季の除角は気温が低いため殆ど問題はないが、夏季に行なう場合、ハエ等の飛来で汚染するため、ヨードチンキ等でアフターケアが必要である。

子牛の除角は季節に関係なく、子牛のボタン部が判明できる時期に行なう必要があり、この点が成牛の除角と異なる点である。